



TITLE:

<図書紹介>八木毅, 東パキスタン,
チャクマ族の言語: 愛知県立女子大
学紀要第 15 輯, 1964, PP.51-80

AUTHOR(S):

大野, 徹

CITATION:

大野, 徹. <図書紹介>八木毅, 東パキスタン, チャクマ族の言語: 愛知県立女子大学紀要第 15 輯, 1964, PP.51-80. 東南アジア研究 1965, 2(4): 119-119

ISSUE DATE:

1965-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54998>

RIGHT:

設定しているが、この現象は他の方言にも並行して認められるのであるから、Semantical な比較考察が必要であろう。同様な事が母音の交替現象についても言える。

音韻論では、Sizang 方言に語頭子音としての g-, r-, 及び Consonant Cluster が、夫々ない事を指摘しているが、その変遷に関する考察は全くみられない。中部方言の r- に対しては、この方言の ʁ- が対応し、中部方言の mutae liquidae に対しては、副次音 -l- の脱落に伴う単独閉鎖子音が対応すると言う事は、比較研究によって明らかである。

過去に文字をもたなかった言語の歴史を再構成する事は、非常に困難であるが、単に言語史だけでなく系譜問題を解明する意味でも、他の方言との比較研究は望ましい。(大野徹)

八木毅：東パキスタン、チャクマ族の言語：
愛知県立女子大学紀要 第15輯 1964. PP.51～80.

ビルマと東パキスタンの国境地帯に住む少数民族の言語については、「Linguistic Survey of India」以降にも多くの個別研究が発表されてきた。しかしその実態は未だ、十分に判っているとは言えない。

この論文は、1964年2月から約1カ月間に亘り、大阪大学東パキスタン総合学術調査隊の一員として、チャタゴン丘陵の少数民族の言語調査を担当した著者のチャクマ語に関する報告である。

内容は、(1)文字組織と音韻体系 (2)文法構造の2部に分れており、主として後者に重点がおかれている。文例がきわめて豊富なため、この論文を一読するだけで我々は、比較的容易にチャクマ語の構造を知る事ができる。

チャクマ語は、従来インド・アーリア系言語の一つとみなされてきたが、著者は文法の活用面における幾つかの非インド語的な特徴に着目し、これがチャクマ語固有の基層ではないかという注目すべき仮説を提示した。

言語の系譜問題は、同系諸言語との比較研究による規則的な音韻対応の存在確認が前提となる。しかるに、同氏の「東パキスタン、チャクマ語の語彙」説林第12輯(愛知県立女子大学国文学研究室編)に集録されている約1800の語彙を見ると、チベット・ビルマ系言語とは全く関連性がなく、その大部分がインド系言

語との間に共通性を示している。

固有のタイ系言語を全く放棄してアッサム語を使用するようになったアホム族の例があるように、言語の系譜問題と民族のそれとが必ずしも照応しない事は、言うまでもない。従って、チャクマ族の形質人類学的な計測結果が、たとえモンゴロイド的であり非アーリア的であるとしても、それとチャクマ語の系統とは別である。

しかし、一見インド語的なチャクマ語の内部に潜在している非インド語的な要素を、単なる借用語として排斥する事なく、superstratum に対する substratum ではなかろうかと考えた著者の着想は、やはり注目に価する。

チャクマ語が、果して固有の言語(それがチベット・ビルマ系であったかどうかは兎も角として)を失ない、周辺の強大な文化語にとって代えられたものか、或いは、古い基層の上に新しい上層語が覆いかぶさった形の重層語 (langue à double couche) であるのかどうか、こういった問題を解明するには、やはり、チャクマ語の言語史を再構成する事が必要であろう。(大野徹)

George Mct. Kahin, Editor: *Governments and Politics of Southeast Asia*, Ithaca: Cornell University Press, 2nd edition, 1964. 796pp.

Comparative politics, as a field, is increasingly gripped by a conflict between several methodologies that scholars are using to make the subject less complex and hopefully more scientific. This volume is a compromise between two methods, the structural-functional approach which is gaining increasing popularity among political scientists in the United States, and the older institutional analysis which is still more in vogue among scholars in Japan, Europe, and India. If one does not have a serious commitment to either of the above methods, or the even newer quantitative-statistical analysis used by behavioral scientists, then this book is of great value.